

目上の方との Eメールのやりとりでみられた日本語学習者の敬語表現 Japanese Learners' Honorific Expressions by Email Exchanges with Superiors

コンスル岩田園美, マクマスター大学
Sonomi Iwata-Consul, McMaster University

1. 背景

日本人社会でコミュニケーションを円滑に進めるためには、敬語（尊敬語、謙讓語、丁寧語などの総称）を正しく使う必要がある。一方で、敬語は日本語に特有な複雑な言語体系であり、日本語学習者が敬語を学習し、それを理解することは、学習者にとっては大きな負担になると言われている。しかしながら、日本語学習者がどのように敬語の使い方を理解し、使用するかをテーマとした研究は少ない。そこで、初級後期の大学生 30 名に教室で「尊敬語・謙讓語・丁寧語」を『げんき第 II 巻』の教科書に沿って教えた後、学習者に目上の方と 200 字程度の日本語で Eメールの交換をさせた。学習者のメールの中で使われた敬語を分析した結果、尊敬語の使い方はほとんどの学習者にうまく理解されていたようだが、特に謙讓語の誤用が多くみられた。一度目よりも二度目のメールでの誤用の数が減った。

1.1 学習者

学習者は、2019 年 1 月から 3 月にかけて週 3 時間、初級後期の日本語を学んだ 30 名。2018 年 8 月までに『げんき I』を第一課から第十二課まで終了した大学生で、年齢は、18 歳から 25 歳、男女比率は、男子学生 50%、女子学生 50% であった。学習者の文化的背景としては、アジア系が約 80%、北米系が 10%、その他、インド・パキスタン系、ヨーロッパ系、中東系、合わせて 10% であった。

1.2 Eメール交換プロジェクトの手順

まず、Eメール交換プロジェクトを始める前に、クラスで敬語を『げんき第 II 巻』の教科書に沿って教え、教室で敬語の使い方を練習した。『げんき第 II 巻』の教科書で学んだ敬語の種類は、尊敬語、謙讓語、丁寧語の 3 種類で、表 1 のようにまとめられる。敬語の使い方をペアやグループなどである程度練習した後、築他（2005）の『日本語 Eメールの書き方』に沿って、基本的な日本語の Eメールの例をあげながら、ていねいさの程度、わかりやすいメールのタイトルの書き方、Eメールで使われる基本的な日本語の表現など、具体的に日本語で Eメールを書く方法を説明した。

Eメール交換をする際に、学習者には、同年代の人と口語体で、目上の人と敬語を使いながら、200 字程度のメールのやりとりをそれぞれ 2 回ずつするように指示をした。そのやりとりの中で、学習者が口語体や敬語をどのように使ったかを分析した。特に今回の発表では、敬語の使い方に焦点を絞った。

表1 『げんき第II巻』で学ぶ敬語の種類

どうし 動詞 Verbs	そんけいご Honorific	けんじょうご Humble	ていねいご Polite
いる exist	いらっしゃる おいでになる	おる (おります)	います
行く go	おいでになる いらっしゃる	まいる うかがう	行きます
来る come	いらっしゃる おいでになる おこしになる	まいる うかがう	来ます
する do	なさる される	いたす させていただきます	します
見る see	みられる ごらんになる	はいけんする	見ます
言う say	おっしゃる いわれる	もうす もうしあげる	言います
聞く listen	きかれる おききになる	はいちょうする うかがう	聞きます
食べる eat 飲む drink	めしあがる	いただく	食べます 飲みます
会う meet	あわれる、おあいになる	おめにかかる	あいます
着る wear	めす、おめしになる	(きる)	着ます
寝る sleep	おやすみになる	(ねる)	寝ます
あげる give	くださる、たまわる	さし上げる ちょうだいする	あげます
もらう get	おうけとりになる	いただく、ちょうだいする	もらいます
借りる borrow	(かりる)	はいしゃくする おかりする	かります

1.3 メール相手の募集

メール交換をする際に、ある問題が生じた。ほとんどの学習者は、日本人の友人を持つクラス・メイトの助けを借りながら、同年代のメール相手は問題なく見つけることができたが、目上のメール相手を見つけるのが困難だった。そんな中、村上(2018)の『SNSで外国語をマスターする《冒険家メソッド》』で紹介されていた Facebook 『The 日本語 Learning Community』という非公開グループに参加し、その中の教師が集まる『職員室』で学習者と200字程度のメールのやりとりを日本語でして下さる先生を募集したところ、村上先生を含め、約15名の先生方が応募して下さいました。一人の先生に1人から3人の学習者を担当していただき、なんとか学習者全員に目上のメール交換相手を見つけることができた。

2. データ分析

学習者のメールを分析したところ、口語体の使い方は、ほとんど問題がなかった。尊敬語の使い方では、中には、自分に尊敬語を使ったり、目上の方に謙譲語を使う誤用もあったが、そういう生徒は、出席率の悪い生徒で、ほとんどの学習者はうまく尊敬語を使うことができた。問題は、謙譲語の誤用が多く見られたことである。特に、謙譲語Iと謙譲語II(丁重語)の混乱が見受けられ、丁重語(おります、参ります、致します、ございます)を正確に使うのが難しかったようだ。

2.1 敬語の誤用例 1

例：私の趣味は、アニメをご覧になります。先生はどこに住んでおりますか。
 尊敬語と謙譲語の混乱が出席率の低い生徒のやりとりの中に見受けられた。この生徒は、「見ることです」の代わりに自分に尊敬語の「ご覧になります」を使い、先生に対して「住んでいらっしゃいますか」とするところを、謙譲語の「住んでおります」+「か」としていた。尊敬語と謙譲語を逆に使ってしまい、読む相手に対して、とても失礼なやりとりとなってしまった。このような基本的な間違いは、尊敬語と謙譲語の違いを明確に説明し、実際にクラスで何度も練習することによって、避けられるのではないだろうか。

2.2 敬語の誤用例 2

例：先生の助言でたくさんお教えになって下さいました。
 尊敬語：お+Verb Stem+になる（お帰りになる、お読みになる等）をたてる相手の行為として使っているのはいいが、表現的な誤用があった。助言はたてるべき人物からの行為に対する尊敬の念を表す敬語接頭辞「ご」を「助言」につけて、「ご助言」とするべきであった。「助言で」と述べているので、「お教えになって」は、先生の行為ではなく、自分に「教えていただいた」と謙譲語を使うのが日本語的な敬語の使い方だが、英語では、**You taught me a lot with your advice.**となり、英語的な表現としては間違いではない。このようなたてる相手にも使えるような動詞を謙譲語として使うのは、生徒がよく間違う難しい点だと痛感した。その他、「～になる」の尊敬語は「～になられる」とするべきだが、「～におなりになる」とする生徒がいた。

2.3 敬語の誤用例 3

例：私は日本語をまだお勉強しております。
 謙譲語：お+Verb Stem+する（お会いする、お貸しする等）の誤用が数人の生徒のやりとりにみられた。謙譲語となるお（ご）+Verb Stem+するは、全ての動詞に使えるわけでないため、学習者にとっては、使える動詞と使えない動詞の区別が難しい。川口（2016）によれば、お+Verb Stem+するは、対象の相手を必要とする行為であるとされている。だから、「勉強する」という動詞は、対象の相手を必要としないため、この形を謙譲語としては使えない。対象の相手を必要とする動詞かどうかは、文の前に、「誰々に」という言葉が入るかどうかで決まる。誰々にお勉強する、誰々にお仕事する、など、一人でもできて、対象の相手を必要としない動詞には使えない。誰々にお読みする、誰々にお貸しする、誰々にお借りする、誰々にお電話するなど相手を必要とする動詞には使える。授業の中で、使える動詞と使えない動詞のリストを挙げて、どんな時に使えないかをはっきりと説明するべきだった。

3. Eメール・プロジェクトの効果

敬語の誤用数は、1度目よりも2度目のメールで減った。やりとりをお願いした先生方には、生徒が間違った敬語を使っても、いちいち間違いを指摘する必要

はないと断ってあったが、中には間違いを全て訂正してくださった先生もいらっしゃる、生徒はその指摘を参考にして、2度目のメールを書いたので、敬語の誤用数が減った可能性がある。また、敬語の誤用を指摘されなくとも、先生からの返事を読んで、敬語の使い方を学び、誤用数が減ったとも考えられる。いずれにせよ、練習を重ねれば重ねるほど、敬語を上手に使えるということがわかった。

このプロジェクトに参加してくださった先生方は、日本、香港、カンボジア、ルーマニア、フランス、カナダなど世界各地で生活しながら日本語を教えていらっしゃる方が多く、各地での食べ物、スポーツ、歴史、文化などの知識が大変豊富であった。一人の教師の知識だけでは限界のあるさまざまな生きた情報が日本語を通して学べたのは、生徒にとって貴重な経験だったと思う。生徒による授業評価にも、「Eメール・プロジェクトによって、日本人の先生方と直接コミュニケーションができて、期待以上に日本語活用能力が上達した。」「このクラスに参加して、日本語を通して世界が広がった。」などの評価を得た。

4. 今後の課題

このEメールプロジェクトを通して、日本人教師にとって、敬語を教えることの難しさを実感した。同じ動詞でも、主語が変わることによって、敬語から謙譲語へと変えなくてはならず、シチュエーションが変われば、それぞれ違う敬語、謙譲語を使わなくてはならない。『げんき II』の教科書にあるように、単に敬語、謙譲語、丁寧語の3種類に分けるだけでは、学習者が混乱するのともわかるような気がした。

2007年に文化審議会が答申した『敬語の指針』によって、現在、敬語は、「尊敬語・謙譲語Ⅰ・謙譲語Ⅱ（丁寧語）・丁寧語・美化語」の5種類に分類されている。メールのやりとりでも、学習者の誤用が多かった「謙譲語」を謙譲語Ⅰ（伺う・申し上げる）型と謙譲語Ⅱ（参る・申す）型に分けることによって、謙譲語を使う上で、学習者の混乱をさけることができ、より正確に理解されるのではないか。

また、授業で習った敬語表現を実際にクラス外で使ってみないと、習得は難しいと感じた。このような実体験を通して、特に日常生活で敬語を使わない海外に住む日本語学習者にとって、多面的な難しさをもつ敬語を習得するには時間がかかるため、教える方もどのように教えたら、学習者にとってわかりやすいのか、教え方を工夫していく必要があるだろう。

今回の実践報告が今後、参加者の皆様が敬語を効果的に日本語学習者に教えることにつながれば幸いである。

参考文献

- 川口義一（2016）『もう教科書は怖くない！！日本語教師のための初級文法・文型完全「文脈化」・「個人化」アイデアブック第一巻』ココ出版
 文化審議会答申『敬語の指針』（2007）Agency for Cultural Affairs 文化庁
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_6/pdf/keigo_tousin.pdf
 村上吉文（2018）『SNSで外国語をマスターする《冒険家メソッド》』ココ出版

築晶子, 大木理恵, 小松由佳 (2005) 『Eメールの書き方』 The Japan Times, Ltd.
Banno, E., Ikeda, Y., Ohno, Y., Shinagawa, C., & Tokashiki, K. (2011). *An Integrated Course in Elementary Japanese Genki II*. Japan Times